

〈死からの視線〉をつくる——都市という〈アトリエ〉

山本浩貴(いぬのせなか座)

Introduction

前回行なったレクチャーでは、吉本隆明が1980年代に都市論の文脈で提示していた〈世界視線〉という概念を検討した。

それは昨今のゲームエンジンが備えているような、どこにでもどのようにでも置ける視点の(想像的かつ総和的な)束であり、遠く上方から今ここを見下ろす視線であり、歴史を概観・比較可能にするスケールであり、既視感であり、先取りであり、幽体離脱であり、その由来は〈死〉とも呼ばれていた。

吉本は都市を構成する様々な場所を〈世界視線〉の多様な組み合わせとして分類していく。おそらく〈世界視線〉そのものが重要なのではない。高度資本主義以降の都市が〈世界視線〉なるものの多様なヴァリエーションとして経験され得ることこそが重要なのだと、吉本は言っているように思える。

そもそも〈世界視線〉を提起した『ハイ・イメージ論』は、都市論から始められながら、しかし同時に小説や音楽、絵画、ダンスなど幾種もの芸術論を断続的に展開する連載として始まっていた。しかも連載が続いていくなかで、都市論の側面は後退し、「現代あり得る高度なイメージとは何か」という、ひどく重い問いへと進んでいくことになる。

そこで言われる「イメージ」は、一般的に想像されるような視覚的なものではない。例えば小説において一文一文が並べられていくなかで、その並びの狭間から《ノン・グラフィックな像》なるものが生じてくるのだと吉本は言う。語られる個々の場面にも、一文字一文字にも還元できない、それらの狭間(場面転換)において生じる極めて抽象的なイメージが、読み書きの経験を根本で支えている……そしてそのような非視覚的なイメージの立ち上げにおいてこそ、言語表現は、その他の芸術ジャンルとも、文化とも、そして都市とも同じ地平で検討されうる。そう吉本は考える。

順序は逆だったのだ。都市論として始められた『ハイ・イメージ論』の、しかし端緒としてあるのは言語表現をめぐる極めて独特な問い——言語表現において《ノン・グラフィックな像》とはなにか——であり、それをより普遍的かつ現在のなものとして展開する上で、都市論への転用が試みられた。吉本の都市論とは、都市を詩の一行一行、小説の一場面一場面を読み書くように、街の様々な場所を歩き、経験し、それにより得られた何かを広く表現全般へと接続させるものとしてあったのである。

さてその上で、吉本の(およそ40年前の!)仕事を、あらためていま有効に使える手立てとして再成型したい。そこで提示したのが、私が近年検討している〈アトリエ〉という概念だった。

《制作者の肉体の置かれた物理的な環境と、制作者が制作に向けて準備し構築し出力していく抽象的な場(体系、マトリクス)を、あえて重ねるかたちで指すもの》として定義されている同概念は、人が表現を行なうなかで(作品を超えて)何をつくっているのか、なぜ多忙ななか制作を日々つづけていけるのか、作品とは何を梱包するもので、それを通じて人と人は何を伝えあい教育しあっているのか、といった問いについて真剣に向き合い考えるための方法であり、議論の単位であり、いま芸術/表現について考えるうえで重視すべきものをともに指し示すための道具である。

作品の手前側で日々を生きている私らやその周囲の環境こそを(完成度やジャンル内評価などよりもずっと)大切に、同時に、ただ私らが生きてそれを表現すればいい(日々を表現としてジャンル/社会/経済/Web上に向けて差し出せばいい)とも言わないために、表現を通じて個々の生が独自に作り出す〈アトリエ〉の、ばらばらなままの伝

達・試行錯誤を検討する。その過程で、例えば登場人物や、物語、モチーフ、テーマ、場面、描写対象などといった、表現を構成するとされる様々な要素や形式を再定義していく（どれも私に独自の表現／思考を促し支える〈アトリエ〉である、と）。これが私の〈アトリエ〉論だった。

こうした〈アトリエ〉をめぐる議論のいささか奇妙な展開例として、吉本の《ノン・グラフィックな像》をめぐる議論を捉えること。その先で、〈世界視線〉＝〈死からの視線〉をより使える概念として考えること。これがこのレクチャー＋ワークショップの「軸」だ。

今ここにいながらにしてそれを見下ろす視線を意識するというを、〈アトリエ〉が肉体に起こす特徴のひとつとして考えてみる。あるいは都市がもたらす多重的あるいは高速連結する環境把握のしかた＝〈世界視線〉の群れを、それ以前には生が持ち得なかった高度な〈アトリエ〉の発生例として考えてみる。

吉本が『ハイ・イメージ論』のピークとも言える章のなかで、島尾敏雄の（ほとんど夢の記述とも思える）作品の読解を通じて行なった〈オルト・パラ・イメージ〉なるものの生成過程の記述を、特異な〈アトリエ〉の生成過程の記述の一種と考える。……そういった試みを、「読み書き」と「都市」と「集団」を用意することで、みなで実際に行ない、検討してみるというのが、ワークショップの概要となる。

ここまでを読んでいただくと、なんともハードで複雑な課題をかされるように感じられるかと思う。ただ、実際にやるのはとても簡単な内容だと思っていただいてもいい。

ばらばらな場所から集まる。

ひとりひとり同じ街へ出る。

なにかしら気になる（文章に書いてもいいと思える）場所や瞬間を探す。

3つ書き留める。

みんなで持ち寄り、ランダムで別の人と交換する。

別の人を書いた文章の組み合わせを、自分がさっき書いた一連のものだと想像する。

その想像のための手段として、やはり同じ街へ出る。

文章を読みつつ街を（なくしものを探すように）歩く。

自分のなかに生じた感覚をまた文章にする。

それをまた持ち寄って、みんなで読む。

ばらばらな場所へ解散する。

うまくやる必要はない。良い文章を書こうとしなくていい。

ただ、ふつうに街ですごすなかでは見つけられていなかったらう場所や出来事を、見つけようとしてみる。それを誰かのために、あるいは未来の自分のために、書きとめようとしてみる。別の人にそれを手渡すこと。手渡されたものを自分に重ね、想像すること。そうして自分から出てくる感覚を、あるいは感覚が出てくる瞬間を、探し、書きとめること。そして、書きとめようとするそのものが、一連の経験を作っている最たる〈アトリエ〉だと知ること。

この、素朴で真摯に街を歩き、想像し、考え込む時間づくりが、このワークショップの用意するものである。

あるいは言い換えれば、都市を使って私から私へ降りてくる〈死からの視線〉をささやかに作り、〈アトリエ〉として体の外に出し、他の人の〈アトリエ〉とともに持ち帰るプロセスこそが、今日の活動内容である。

プロセス

0. 集まる。別々の街の、別々の家から。
1. 街に出る。ばらばらに、同じ街へ。一人で過ごしやすいと思えるところを探し、そこで一人で立つ（座る）。
2. 考える。夢のなかに自分がいると想像する。まわりにも人がいるだろうけれど、それらはみんな、別の夢を見ている自分自身だと考えてみる。そのひとたちから、あなたは見られていたり、想像されていたり、無視されていたりする。
3. あらためてまわりを見渡す。歩きはじめる。街のなかに、あなたをハッとさせるような場所や出来事がないか、探す。見つけたら、手短かに言葉でメモする（140字程度が目安）。小さな発見を記した日記のように。それに対する自分の思いや、そのときそこにいた人のことなども、必要であれば記していい。
4. ぜんぶで3つの文章を作る。
5. 集合場所に戻る。1つの文章を1枚の紙にそれぞれ転記し、集める。壁に貼る。みんなで読む。
6. すべての文章を壁からはがしてシャッフルする。ひとり3枚ずつ配り直す。自分の文章が来てしまったら、別の人と文章を交換する。自分以外の文章が3つ、ランダムで手元に置かれている状態にする。
7. 3つを好きな順序に並べてみる。その際、自分がさっき外に出て書いた一連のものたちだと想像する。自分が街を出て、書かれているそれらに出会って、書き留めているすがたを「思い出す」。
8. ふたたび街に出る。手元の3つの文章に書かれた場所を探そうと、ひとりで歩いてみる。無くしものを見つけないように。今はもう忘れていたけれどきっとあったらどうかの自分を再現しようとするように。「ここが文章に書かれている場所だ」というところを見つけたら、しっかり文を読み直す。それを書いている自分を想像する。そしてその自分に、今ここに立っている自分が「もう書かれている」のだと想像する。見つからない場合も、近いと感じられるところを探してそこを文章の場所に「見立ててみる」。あるいは文章の場所が、この街のどこかにあり、それを書いている自分もまたそのそばにいたのだと想像する。
9. 自分のなかにわきあがってきた感覚をメモする（140字程度が目安）。やはりささやかな日記のように。いつか思い出すために。
10. 集合場所にもどる。文章を集め、みんなで壁にはる。みんなで読む。
11. 解散する。別の街に移動したり、自分の家に帰る。

補足

・都市にはいくつもの建物や物、土地が、さまざまな目的や意図や歴史のもと建てられ、置かれ、整えられている。つまりはある人にとって必然的なものだけど、他の人にとっては由来がわからないものであふれている。必然と必然のはざま、誰にも知られていない景色があちこちにある。

そしてそこをさまざまな人が、自由に歩いている。それらの組み合わせが、ときにあなたをハッとさせるような場所や出来事を作り出している。都市は、そうしたハッとする環境を、次々見つけることのできる場所として、(おおむね)あなたに開かれている。

・このワークショップは、優れた文章を作ることが目的ではない。何かを書こうとしながら街を歩くこと、見つけたものを書いてみることに、書いたものが人に手渡されること、人の書いたものを引き受けるために街を歩くこと、そのとき起こったものをしっかり見つめ感じること、見つめ感じるために「文章を書く」ことを再び使うこと、そのときできた〈アトリエ〉をひとと共有すること(そのために文章を差し出すこと)、できたいくつもの〈アトリエ〉を文章のかたちで読み、持ち運び、またどこかで思い出すこと。……そのような一連のプロセスのために「書く」「読む」を使う。良い文章を書き、読み、評価することが目的ではない。

・つまり、うまくできなくてもいい。何かをやろうとしたその角度が記録され、共有されることで、いくつもの角度が(自身の検討の時間と絡まりながら)まとめて把握される経験それ自体が大事。

・つまり、作品を作るというより、独特な思い出を作ることが大事。

・文章を読み書くために街を歩いているのか、それとも街を歩くために文章を読み書いているのか。わからなくなることがむしろ求められている。

・ハッとする場所、と言われても困るかもしれない。簡単に考えていい。夏休みの宿題でなにかしら今日の出来事を日記に書かなければならない、というような気持ちで。これなら書いていいかもというものをあなたのなかで／街のなかで探すような感覚で。「書くために探す」ということが、結果的にあなたの目を「おもしろいものを探す目」にする。あなたの周囲の環境を「あなたの体が強く反応する環境」にする。そこからあなた独自の〈アトリエ〉は生え始める。

・人が見つけたものを自分が見つけようとする時の感覚を言語化するのが一番大変かもしれない。こんなものをどうやって受け取ればいいのか、と思うかもしれないから。例えば吉本隆明のように、遠くから今ここにいる私を見下ろす視線(幽体離脱みたいな視線)をイメージしてみてもいい。文章を書いた誰かを、今は忘れたけれどかつていたはずの自分としてイメージしようとしてみてもいい。書かれてる場所ってここじゃん!と不意に思ってしまったことそのものの偶然的な巡り合わせや驚きを言語化してもいいし、あらためて先ほどの自分がどのように歩き、言葉を書いていたかを思い出そうとするそのときの質感を書いてみてもいい。ただ、手短かに、ちょっと抽象的でもいいから、持ち運びできるような分量で。

・このワークショップは、ある意味では「ツアーガイドを自分たちで作る」ものだと言えるかもしれない。ただしルートは、偶然、結果的にできるもの。過去のあなた、あるいは別のあなたがもとになって、知らない誰かのルートができる。それを自分と思込む。

・じっと想像する。今ここにいる、別の私を。

・あなたが並び、連結する。その連結のための接着剤として、私を別のところから見下ろす視線(その隔たり、距離)を使う(使えるかもしれない)。

・最後には、少なくとも数の「街を歩く私を少し遠くから想像する私」をめぐる〈アトリエ〉が並ぶ。それらを抱えて、自分の街、自分の生活に帰るまでが、このワークショップ。